

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

自分たちで育てたい！！／社会福祉法人長尾会 長尾保育園（大阪府）

生き物への興味から、繰り返し関わったり世話をしたりする子どもたちの姿は見られますか？毎年、子どもたちの成長を捉えることができるこの時期の事例に、オタマジャクシとの関わりを大切にされた実践があります。今回は、「表現」を観点にして、小さな生き物への興味を深める子どもたちを捉え、保育の工夫を図った事例をご紹介します。



### ● 「これ何の卵？」／5歳児

赤太文字…子どもの言葉 紫斜体文字…保育者の言葉

#### ✿ 6月中旬 [興味・発見の表現、疑問の表現]

##### きっかけ

Yちゃんが田んぼで取ってきた卵をクラスに持ってくる。みんなは、「これ何の卵？もしかしてカエルの卵かも？」と興味津々。しかし、小学校の先生をしている保護者から「これはカエルの卵じゃないですよ」と言われた。

##### 保育の工夫

子どもたちが見やすいように、机の上に卵が入った容器を置き、虫眼鏡を準備した。

子どもたちは、「何の卵やろなあ…」「Yちゃんのお父さんがカエルの卵じゃないって言ったもんなあ」と言い、じっと見つめて観察をしている。「何が出てくるのかな？」「卵の中に線あるで」「*ほんまやなあ*」などと、何が生まれてくるのかという興味でワクワクしながら虫眼鏡で観察していた。何の卵か分からなかったが、何が生まれてくるのかを楽しみしながら、半信半疑で育て始めた。

#### ✿ 翌日

##### 保育の工夫

子どもたちが毎日すぐに観察できるように、保育室の入り口付近に容器を置き、図鑑や絵本も側に置いた。子どもたちと一緒に図鑑やインターネットで調べた。

次の日、卵から何かが生まれ始めた。「先生？卵からミミズみたいなん出てきたで」「いやーほんまやなあ」「これ何やろ？」「んー何やろなあー」などと、いったい何なのか興味をもった。さらに次の日、見てみると横に一列に並んでいた。「これ泳がんとへばり付いてるなあ。やっぱりオタマジャクシと違うんかな」「先生も見たことないからなあー違うんかなあ」子どもたちはカエルになる前はオタマジャクシであることは知っていたが、図鑑で見たモノとは違うので、友達と「これ何なんやろな」「何か針金みたいなん中にあるで」「よく見てるね」と話が盛り上がっていた。



#### ✿ 6月下旬 [疑問の表現]

少し大きくなっているオタマジャクシ。「目が生えてきたで」「*どれどれ？*」見るとくっきり目が見えていた。「かわいいなあ」「そうやなあ」「このオタマジャクシは何のカエルになるんかな？」「この絵本やったら何になってる？」「アマガ

エルって書いてる」「**なあ先生、カエルになったらどうする？**」「**みんなはどうしたい？**」「んー逃がすー」「お母さんカエル、待ってるで」「**じゃあカエルになったらみんなで田んぼに返しに行こうなあ**」「うん」子どもたちと約束し、カエルになるまで大事に育てていこうと話をした。

「**オタマジャクシなあ、小さいのと大きなおるけど何で？**」「**Sくんは何で思う？**」「んー先に卵から生まれたから」「ああそうか、兄弟やから先に生まれたのがお兄ちゃんなんかなー」「**そう**」「えーちゃうで、いっぱいご飯食べてるからやで」「**そっかーいっぱい食べてると大きくなるもん**」などと、毎日何気なく見ているようで、小さい変化に気付いたり、疑問をもって考えたりしていた。

その後も「先生、オタマジャクシ作ってん」とAちゃんが見せにきた。オタマジャクシの存在はクラスの子どもたちにとっては、なくてはならないものになっているようであった。



### 7月下旬 [疑問の表現、実践の言葉、共有の表現]

連休明けに大事件が発生。朝から子どもたちは保育者に「先生、大変オタマジャクシが死んでる」「えー何で一」「ほら見て」「**うわあほんまやなあ**」と観察すると、残ったのはたった5匹。「**何で死んだんやろう…**」と、とても悲しそうに話し出した。「**暑いからやで**」「**そうやなあ**」などと、連休の間部屋は窓も閉めっぱなしでずっと暑かったのだろう。すると、もう一人の子どもが「**先生、お休みの前に葉っぱじゃなくて白ご飯あげたからちゃう？**」「**そうなんかなあ**」と言った。

確かに休み前に白ご飯も食べるって絵本に書いてあったのであげていた。「**違うわ、病気になったんやで、きっと**」「**そうかもしれないね**」クラスが暗い雰囲気になってしまった。「先生、お墓に埋めてあげよう」と、みんなで園庭の隅に行き、オタマジャクシを埋め、思い思いの別れの言葉をかけた。部屋に戻り、**残った5匹のオタマジャクシの育て方の話し合いをした**。「もう、**餌に白ご飯入れるんやめよう**。だってなあ水が白くなって臭くなってたもん」という言葉で、餌は湯がいた葉っぱだけにする。こうして、餌は湯がいた葉っぱのみを入れ、保育園が休みの時は、ふたをして外に出しておくことになる。

#### 保育の工夫

田んぼに帰すという選択をせず、子どもたちが育てたいという気持ちを尊重し、引き続き飼うことにする。

### 8月中旬 [疑問の表現、意欲・期待の表現]

5匹いたオタマジャクシは、とうとう3匹になってしまった。

よく、餌も食べてどんどん大きくなる姿に子どもたちも嬉しそう。

「**このオタマジャクシ、足生えてきてるで**」と、虫眼鏡でよく見ると、小さくて細い足が生えていた。「ほんまやなあー」「うそーどこどこ」虫眼鏡や場所の取り合いになるほどの大興奮だった。「他のオタマジャクシは？」「これも何か足生えてるみたいやで」「ほんまやー」

2ヶ月かかってやっと後足が生えてきた。「すごいなあ」「もうすぐカエルになるなあ」嬉しくて仕方がない様子の子どもたち。「**先生、足がえたらどうしたらいいん？**」「絵本に書いてるで。石を置くんやって」「**じゃあ、園庭で大きな石拾ってくる？**」「**取ってくるわー**」「**次、前足生えたら上ってくるん？**」「**そうみたいやで**」「**うわーAちゃん楽しみ!**」「**早く見たいね**」「うん」「**どんな風にカエルになるんやろ**」などと、いろいろな想像をしながら、子どもたちは次に前足が生えてくるのを心待ちにしている。



## ✦ 考察

オタマジャクシに足が生えてきたことで、カエルになっていくことへの意欲・期待の気持ちが現れ、大に育てていく子どもの姿が見られた。生き物を飼う、験をした子どもたちには、生き物の変化や異変のたびに心を動かし、様々な考えをもち、興味を深め探求する成長が見られた。そして、命の大事さも考える良い機会となった。オタマジャクシを育てていくことでいろいろな経験ができた。その経験により、子どもたちは様々な表現をする力を発揮することができたのではないと思う。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」